

敬語接頭辞「オ-／ゴ-(御)」の使い分け原理試論

——ポライトネス理論の観点から——

山田 健三 奥瀬 真紀

1 はじめに—問題の所在—

本稿は、現代日本語において生産的に用いられている敬語接頭辞オ-／ゴ-(御)の使い分けの原理を明らかにすることを目的としている¹。オ-／ゴ-の使い分け原理については「語種」という観点から、オ-は和語に、ゴ-は漢語に付くとするのが原則（以下、語種原則）とされてきているものの、これに当てはまらない例も少なくなく、現在の研究は、それらを例外扱いしながらも、説得的な例外説明がなされているとは言い難い状況である、という現状認識を我々は抱いている。

本稿では、オ-／ゴ-が、現代日本語においてどのような使い分け原理（システム）に沿って実現しているか、という「共時」システムの記述を目指す。ここに「共時」ということを事々しく言うのは、語種原則で大多数の例の説明が可能であったとしても、語の出自という通時的概念に関わる「語種」という術語を用いては、共時的原理になりえず、説明概念としては不充分もしくは不適當である、と考えるからである。このように、オ-／ゴ-の使い分けについて、通時的概念である「語種」の視点ではなく、共時的観点からの考察が必要であると考えられる。そこで、本稿では敬語接頭辞オ-／ゴ-の使い分けがどのようになされているのか、現実の場面での言語選択、という視点を念頭に置いた考察をし、その仕組みを明らかにしたい。

2 先行研究—「語種」という分類指標

まずはこれまでの研究史を概観しておく。ただ、当該の問題については、さほど研究の蓄積があるわけではなく、また辞書やマナー本などに見える一般的説明と専門的研究論文との間に、大きな違いがあるわけでもないようである。オ-／ゴ-の使い分け原理についての説明は、国語辞書、敬語マナー辞典のような一般に普及し実用的な目的で用いられるものから、日本語研究において参考にされる専門辞書や文法概説書、敬語についての研究書や論文などといった専門的・学術的なものまで、ほぼ一貫して語種原則が指摘されている。以下、いくつかの文献の記載を確認する。

¹ なお、オン-／ミン-／ギョ-(御)という敬語接頭辞もあるが、現代日本語においては「オン礼」「ミン心」「ギョ意」など限られた語にしか付かず、既に接頭辞としては生産的な段階にないと判断されるため、考察の対象としない。

2.1 一般的説明：国語辞書、敬語マナー本など

国語辞書では、例えばゴについて「《接頭》①主に漢語の体言に冠して尊敬の意を添える。②主に漢語の体言に冠して丁寧の意を添える。」(『広辞苑第六版』項目「ご【御】」、下線引用者)とするように「漢語」という語種が関わっていることが述べられ、敬語マナー本では、「原則としては、和語(もともとの日本の言葉)には「お」を、漢語(漢字音で読む言葉)には「ご」をつけます」(浅田秀子(1996:67)『敬語マニュアル』)といったように、オ-/ゴが接続する語の分類指標として「語種」が指摘されている。この説明は、オ-/ゴの使い分けに関して広範に見られ、一般的な説明と見てよい。

2.2 学術シーンでの説明

語種原則が第一として考えられているのは、現今の学術シーンにおいても基本的に変わらない。

例えば、辻村敏樹(1991)は、(1)のように説明する。

- (1) お【御】(中略)「おが和語であるところから、和語に付くのが一般的であるが、漢語でも「正月」「時間」「天気」「客」など「お」のつくものは少なからずあり、「おビール」「おニュー」のように外来語に付くこともある。(p.49、下線引用者)
- ご【御】ほとんどの場合、漢語に接続するが、きわめてまれに、「ゆっくり」「もっとも」などの和語に接続することがある。(p.215)

例外説明があるものの、語類の提示に止まっており、例外自体の説明に踏み込めていないのは、多くの先行研究に共通するものである。オ-漢語の例は「お愛想、お菓子、お客、お産、お辞儀、お食事、お茶、お宅、お布施、お盆、お面、お礼、お椀」など少なくとも、ゴ-和語例も「ごもっとも、ごゆっくり、ごゆるり」など僅少なながら存在する。

ただ、語種原則に関して「「お」が和語であるところから、和語に付くのが一般的」(下線部)とあるように、オ-/ゴに関わらず、一般的に漢字熟語のヨミは、「重箱読み」「湯桶読み」といった特別な(markedな)呼称が用意されていることから想像されるごとく、同一語種を重ねた[音ヨミ+音ヨミ]もしくは[訓ヨミ+訓ヨミ]が通常(unmarked)である一般原則に沿った理解が垣間見える点である。このことから、語種という観点からの説明は、オ-/ゴに限らない、より一般的なルールに内包されるものとして理解される。この点は、他の研究にも指摘はあるが、後の議論のためにも注意しておきたい点である。

池上秋彦(1984:65-66)も、語種原則の記述は同様であるが、原則に適用例を「お酒⇔ご酒、お報せ⇔ご報告、お訪ね⇔ご訪問、お使い⇔ご使者、お葬⇔ご葬儀、お祭り⇔ご祭礼、お招き⇔ご招待」というように、同一意味内容の語の和語形：漢語形の対応例を上げている。なお、同論文では触れてはいないが、ここでの挙例は、語種の違いから生じるスタイル差をも示したものとして注意しておきたい。

さて、以上のように学術シーンにおける説明も大筋で一般書と大過ない。語種原則は動かしがたく思える。

語種原則の有効性は、統計による実態調査によっても確認される。田中章夫(1972)は、

国立国語研究所による「新聞の語彙調査」の結果をもとにこの原則を認めている。

オ	和語	非和語	計	順位	オ+漢語	度数	順位	オ+漢語	度数
	1,101 78.9%	295 21.1%	1,396	1	おしゃれ	38	12	お中元	7
				2	お客	28		お風呂	7
ゴ	漢語	非漢語	計	3	おけいこ	18	14	お化粧	6
	561 99.6%	2 0.4%	563	4	お正月	17		お電話	6
				5	お天気	16	16	お医者	4
				6	お嬢(さん)	15		お菓子	4
				7	お茶	14		お食事	4
				8	お料理	11		お歳暮	4
					お礼	11		お洗濯	4
				10	お宅	9		お得(徳)	4
					お役	9			

表1：オ-/ゴの語種別分布
(=田中1972・表1)

表2：オ-漢語の用例と使用数(=田中1972・表2)

表1は、オとゴがどのような語に付いていたのか、その分布をまとめたものである。田中(1972)は、オ-非和語が全体の2割程度であること、ゴ-非漢語の例が2例(「ごもっとも」「ごゆっくり」)が各1例)しか見られないこと、そして、オ-漢語の例は内容的に付くことばが限られていること(表2より)から、「慣用的な限られた用法をのぞいては、「オ」が和語に、「ゴ」が漢語につくという傾向は、強く定着しているとみられる」とし、語種原則を統計的調査結果からも追認する。例外説明は「慣用」として説明されるべきもの、としているように解される。つまり、語種原則から外れるオ-漢語やゴ-和語の例が全体からして決して多くないことは、これらが固定的な用法で、生産的に用いられているわけではないことを意味する、ということであろう。ここで「慣用」とされるオ-漢語の実例は、表2に示す通りであり、語種原則から外れる例を「慣用」という用語で例外説明しようとしていることになる。

しかしこれらが「慣用」の結果であることを認めたとしても、なぜ語種原則を外れたオ-漢語が「慣用」とされたのだろうか。むしろ、そもそもその「慣用」を許した原因こそが問われるべきではないか。

3 語種原則以外の理由

さて、本研究の目的は、オ-/ゴの選択原理を突き止めることにあり、その意味で、オ-/ゴ少なくともいずれかの接頭辞がつく語しか対象にしないことになる。

しかし、オ-/ゴはあらゆる語に付くわけではなく、いずれも付かない(付きにくい)語も存在する。当然、オ-/ゴという敬語接辞そのものの接続可否の原理を考える視点も必要となり、そういった視点からの先行研究も見ておきたい。

3.1 付着度という視点

柴田武 (1957) は、オ／ゴがどのような語につくか、つきにくいかな、つまり敬語接辞そのものの接続可否の程度 (以下、付着度) を考察したものである。『日本語アクセント辞典』(NHK) 所載の約47,000語からサンプリングによって4,830語を選定し調査を行い、その結果、接続しにくい後部要素の条件として以下のものを掲げている。

1. 外来語 (ex. ×おマヨネーズ、...／○おソース)
2. 「お」で始まる語 (ex. ×お応接間／○お茶の間)
3. 長い語
4. 悪感情の語 (ex. お顔／×おつら、おきず／×おあばた)
5. 特定の意味範疇に属する語 (ex. ×色・自然に関する語、)

また、宮田剛章 (2005) も同様の調査を日本語能力試験1級までの出題範囲に入る全ての名詞項目 (全6,656項目) に対して行っている。この6,656項目の内訳は、和語が1,670語 (全出題項目の25.1%)、漢語が4,158語 (全出題項目の62.5%) であり、結果はオが200語 (うち和語140語) ゴが101語 (うち全て漢語) に付いた。これを受けて宮田 (2005) は、語種原則を確認した上で、それ以外の言語要因がオとゴの付着度に影響するのか、または付着しにくくしているのかについても分析する。分析対象の言語要因として取り上げられた視点は

1. 語種 (和語・漢語・外来語・湯桶読み・和語+外来語・重箱読み・外来語+和語・外来語+漢語・漢語+和語+漢語)
2. 拍数 (1～9拍)
3. 音韻的要因 (「オ」で始まる語、「ゴ」で始まる語)
4. 形態的動作性の有無 (形態的に動詞から派生した名詞であること。和語動詞の連用形とサ変動詞の語幹を指す。)

の4点であり、これらが複合的に付着度に影響するとみて、結果、オが付きやすいのは、オ以外で始まり形態動作性のもと3拍の和語および混種語であり、ゴが付きやすいのは、ゴ以外で始まり形態的動作性のもと4拍の漢語であるとする。これらは客観的な指標に基づく結果として理解されるべきものではあるが、例えば語の長さ (拍数) が、オの場合とゴの場合とで異なることは、付着度の問題ではなく、そもそもの和語と漢語の間に存在する拍数の差に過ぎないのではないかな。また、形態的動作性というの、そもそも敬語接頭辞である以上「行為」に関わる名詞群が主となることは当然のことであって、取り立てて新たな視点が提示されたわけではないように思える。

柴田 (1957) も宮田 (2005) も、敬語接辞が前接できるかどうかについて、後部要素 (語基) の性質の諸要素によって条件化できるという予想の下、様々な条件 (変数) を仮設し、その有効性を検証しようとしたものであろうが、その変数設定自体が、敬語の特質である対人関係の問題を離れて、ほぼ形態論レベルでの解決を探っている点に疑問を感じる。しかし、

いずれにせよ、柴田（1957）は、そもそもオ-/ゴ-選択自体を（おそらく暗黙の前提として）問題としておらず、宮田（2005）は語種原則を第一に認めているように、語種原則を最も大きな要因とする点に変わりはない。

4 語種原則の妥当性について

以上、先行研究において、語種原則が一貫して認められてきている研究状況を確認してきたが、本稿冒頭で述べた点も含めて、語種という通時的概念を用いた説明には、使い分けという観点からは(2)のごとく疑問が少なくない。

- (2) a. (既に述べたように) 語種原則という捉え方は、「重箱読み」「湯桶読み」といった特別な (marked な) 呼称からも想像されるごとく、「御～」をヨム際の同一語種を重ねたヨミ ([音ヨミ + 音ヨミ] もしくは [訓ヨミ + 訓ヨミ]) が通常 (unmarked) と理解されている一般原則に内包されるものに過ぎない。(= 語種原則の一般原則への吸収)
- b. (にも関わらず) 少ないと言えども外来語に付く例がある。(= 「語種」原則の破綻)
- c. 例外が少なくなく (田中 (1972) の調査ではオ-の付く語の内 2 割程度が和語以外。宮田 (2005) の調査にいたってはオ-の付く語の内 3 割が和語以外という結果)、しかも例外説明はほほない (せいぜい「慣用」という程度)。
- d. そもそも、現実の言語生活で、語種を意識・確認しながらオ-/ゴ-選択するという状況はほほ考えがたい。(例えば「お忙しい中申し訳ありませんが、ご確認お願いします。」という発話をするときに、“「忙しい」は「和語」だからオ-、「確認」は「漢語」だからゴ-を付けよう”といったプロセスを踏んでいるだろうか?) (= 共時システムとしての語種原則そのものへの疑問)

以上のように、「語種」という通時的概念を含む術語で「オ-/ゴ-(御)」の使い分けという共時的言語状態を説明するのは、やはり方法論的に問題がある。このことはむしろ、「語種」による使い分けが実際の言語選択のプロセスを反映したものでないために、それに当てはまらない例が多く見られるのだと考えた方がよいのではないだろうか。

5 語種原則外の観点からのオ-/ゴ-の捉え方

これまで述べてきた様に、これまでほとんどの場合オ-/ゴ-は語種による使い分けがされると考えられてきた。しかし、ある語に付く場合に限ってではあるが、オ-/ゴ-に語種ではない使い分けがあることの指摘が、菊地康人 (1994) と西隈俊也 (2004) に見られる。両者が語種以外の使い分けを指摘したのは、「返事」という語に付く場合のオ-/ゴ-であるが、それぞれが主張する使い分けの基準は異なる。以下に詳しく見ていくこととする。

5.1 菊地康人（1994）：機能による使い分け

菊地（1994）はオ-／ゴ-の使い分けについて、語種による使い分けを「原則」として認めた上で、「返事」に関する「例外説明」を(3)のように述べている。

- (3) 一方、「お」か「ご」かで〈機能〉を区別する傾向のある語も、稀にある。「ご返事」「お返事」は、前者が尊敬語・謙譲語A、後者が美化語（たとえば幼稚園言葉）という使い分けの傾向が、かなり認められそうである。（pp.385-386）

「返事」という一語に限っての分析ではあるが、「機能」という新たな観点からオ-／ゴ-の使い分けを捉える試みは興味深く、菊地（1994）の機能からの敬語分類に従えば、(4)のようになる。（カッコ内は菊地による定義）

(4) ゴ-返事：

尊敬語（話し手が主語を上位者として高める働きを持つもの）

謙譲語A（補語（話題の人物）を高める働きを持つもの）

オ-返事：

美化語（話し手がきれいに／上品に述べる働きのあるもの）

菊地（1994）が「ご返事」を尊敬語・謙譲語A、「お返事」を美化語として使い分けるという分析に従って使用実態を推定するならば、つまるところ「ご返事」と「お返事」がそれぞれ、例えば「ご返事くださりありがとうございます。（尊敬語）」「明日中にご返事いたします。（謙譲語A）」、「お返事ちょうだいね（美化語）²」のように用いられ、尊敬語・謙譲語Aでは、ご返事＞お返事、美化語では、逆に、ご返事＜お返事、という使用実態が推定される。

そこで「ご／お返事くださり」「ご／お返事いたし」「ご／お返事ちょうだいね」の使用数をそれぞれ Google 検索エンジン（語順も含め完全一致）で調べたところ、表3のような結果になった。（2013年10月30日調査）

	ゴ-		オ-
返事くださり（尊敬）	25,800	<	160,000
返事いたします（謙譲A）	467,000	<	4,860,000
返事ちょうだいね（美化）	7	<	148,000

表3：Google 検索エンジンによる、オ-返事／ゴ-返事の使用数

もとより質より量の調査に過ぎないが、大まかな傾向はつかめよう。結果、美化語表現（返事ちょうだいね）については、たしかに「ご返事」はほとんど見られず、もっぱら「お返事」が偏在しているようだ。しかし、尊敬語・謙譲語Aでは予想と異なり、「お返事」が

² 「お返事ちょうだいね」と「ね」を加えた理由は、「お返事ちょうだい」だと「お返事ちょうだいしたく…」のような謙譲表現にヒットする可能性があり、それを排除するためである。

それぞれ圧倒的に多く、この結果による限り、「ご返事」を尊敬語・謙讓語A、「お返事」を美化語として使い分けると主張するのは難しそうだ。

5.2 西隈俊也 (2004) : フォーマリティーの違いと相手や場に応じた使い分け

西隈 (2004) は、日本語使用法に関する Q&A の回答であるが、当該の問題に関して、語種原則は認めた上で、和語以外に付く場合のオ-の特徴³やオ-とゴ-両方が付く語の特徴などにも触れており、「お返事」と「ご返事」に関しては(5)のように述べている。

- (5) 使い分けのポイントとしては、フォーマリティー (形式的かどうかの度合い) も考慮に入れる必要があるでしょう。例えば、お母さんが答えない子どもに「お返事は？」とは言いますが、「ご返事は？」とはあまり言いません。一方で上司、ビジネス相手に対してはフォーマルに言わないといけないので「ご返事をお待ち申し上げております」と言うのが無難でしょう。

このように、西隈 (2004) は、「ご返事」がフォーマリティーの高い表現、「お返事」がフォーマリティーのそれほど高くない表現として使われていることを指摘している。西隈 (2004) はフォーマリティーを「形式的かどうかの度合い」とし、「ご返事」はより形式的な、「お返事」はそれほど形式的ではない表現として捉えている、ということである。なお「お返事」を使うのか「ご返事」を使うのかを決定する要因として何が考えられるのかについてはまとめられていないが、挙例から推測するに、母と子、上司と部下といった話者と聞き手の関係性や、ビジネスの場か家庭かといった場の違いがその要因だと考えているようである。

なお、話者と聞き手の関係性と述べたが、日本語における敬語表現の特性上、ここに話題の人物との関係性も加えて判断される場合があることも指摘しておく。例えば、上司に対して「先方からのご返事はまだ頂けておりません。」と言うとき、これは聞き手である上司に対する敬語ではなく返事をくれるはずの「先方」への敬語表現である。話題の人物=聞き手であるならば、話者は聞き手と自分の関係性のみに配慮して言葉を選べばよく、この場合なら聞き手である上司を立てる表現をすればよい。しかし、話題の人物≠聞き手の場合、話題の人物と聞き手と自分の関係性を考えなければならない。そのためここでは、聞き手である上司を自分と同じ会社の人であることからウチの人物ととらえ、ソトの人物である先方をたてる表現を選択する。このように、話者が関係性を配慮しなければならない相手は必ずしも聞き手だけというわけではない。ここから先、「相手との関係性」のような表現をすることがあるかと思うが、この「相手」には聞き手はもちろん話題の人物も含んだものと諒解されたい。

さて、西隈 (2004) の指摘するフォーマリティーによる使い分けというのは、語種・敬語機能といった、分析的・知識的性格が強いものとは異なり、話し手の感覚の程度によるところが大きい理解の仕方である。フォーマリティーとは、相手との関係や自分のいる場を話し手がどう感じ取るか、どう測るのかによって決まるものである。この捉え方は、実際の言語選

³ 西隈は、相手の所有物 (含飲食物) には、漢語・外来語であっても「お」をつける傾向がある、という見解を示している。

択の感覚に近いという意味で、妥当性の高いものに思われる。

ただ、西隈（2004）の指摘は、何かしらの調査に基づいて述べているわけではなく、あくまで個人の経験・内省による印象といった感を拭えない。同じ日本語話者として、我々は西隈（2004）の指摘するような使い分け意識に共感するが、より多くの人に意見を求め、客観性を得ることが必要であろう。そこで「お返事」と「ご返事」にフォーマリティーの差を認め、相手や場の違いに応じて使い分けるといえることがあるのかどうか、以下の調査を通して確認する。

6 「お返事」と「ご返事」に対する使用者の意識調査

西隈（2004）の指摘するような使い分けが実際に行われているのか、アンケートを用いて使用者の意識を調査する。調査対象は20名、内男性が5名、女性が15名であった。なお、年齢は多い順に、20代14名、50代3名、10代2名、40代1名である。アンケートの基本的な構成として、前半で「お返事」と「ご返事」の使用状況や意識について尋ね、後半で具体的な場面や相手を設定し、提示した文の中で「返事」をどのように言うか選択してもらった。

アンケートでは「お返事」と「ご返事」どちらも使うという人が実際にどの程度いるのかを確かめるため、「「返事」を丁寧に言うときどのように言いますか」という設問を立てた。これに対して、「お返事とご返事どちらも使う」と答えたのが4名、「お返事」が14名、「ご返事」が2名と、両方使うという人はそれほど多くないと見える結果になった。オとゴが両方付く語としてよく例に挙げられる「返事」だが、実際にはそのような傾向はあまりないのだろうか。しかし、設定された場面や相手によっては「ご返事」を選択している人が、14名中7名いることが分かった。これらの人を合わせると、全体の半数以上である11名が「お返事」と「ご返事」をどちらも使うことになり、「返事」にオもゴも付ける人は一定数いると言える。

次に、彼らが「お返事」と「ご返事」をどのような時に使うのかを確かめる。先に挙げた「お返事とご返事どちらも使う」と回答した人に対して、それぞれをどのような時に使うか尋ねた。すると「やや親しい仲ではお返事、やや硬い関係ではご返事」「相手の立場に応じて使い変える」「ご返事の方が堅苦しい時に使う。自分より立場が上回っている人に使う」などの意見を得た。総じて相手との関係性によって「お返事」か「ご返事」かが判断されており、「お返事」は親しい人に「ご返事」は目上の人や硬い関係の人に対して使われている。相手との関係性に応じた「お返事」と「ご返事」の使い分けというのは西隈（2004）で指摘されていたものであり、それぞれが使用される相手の特徴についてもこの回答と西隈（2004）の挙げた例は近いものと言える。

また、全体に対して「お返事とご返事で印象の違いなどを感じますか」「それはどのような違いですか」という問いも立てたが、16名が「感じる」と答えた。その違いについては、大きく分けて①使用場面に関するもの、②語感、③「ご返事」に対する違和感、の三つが挙げられる。

①については、先述の「相手による使い分け」と同様「使用する相手」の違いという回答も見られたが、他に「使用する場」の違いが指摘されることがあった。詳しい回答としては

「ご返事はより丁寧な場面で使うと思います」「ご返事はおかしいと思うのであまり使わない。ただ、公式な場では使わざるを得ない気がする。」が挙げられる。「お返事」と「ご返事」で使用する場に違いがあることも西隈（2004）で述べられており、これについても確認がとれたことになる。

また、②の「語感」についてだが「‘ご返事’の方が堅くるしそう」「ご返事の方が仰々しい気がする」「お返事は優しい感じがしますが、ご返事だとかしこまった印象がします」といった回答が見られた。「ご返事」に対して、堅苦しさや仰々しさ、かしこまった印象を抱いているようだが、これらの印象は「形式的な表現」に対するものとして十分に考えられるものである。「ご返事」にこのような印象を抱いている一方で「お返事」には優しい感じを受けているというのは、両者にフォーマリティーの差を感じ取っていることの表れだと言ってよいのではないだろうか。つまり、相手や場による使い分けが実際に行われていることに加え、フォーマリティーの差が実際に認識されていることについても確認できたと言えるだろう。

なお、③の「ご返事」に対する違和感は、アンケート中一貫して「お返事」しか用いなかった人達によるものであり、全ての人が「お返事」と「ご返事」にフォーマリティーの差を感じ取ったり両者を使い分けたりするというわけではないようだ。

この調査から、西隈（2004）の指摘するように「お返事」と「ご返事」にフォーマリティーの差を認め、相手や場に応じて使い分けることが実際に行われていることが確認できた。相手や場によってフォーマリティーの違う語を使い分けるというのは、実際にどのような語を用いるか判断する際の感覚にも近く、言語選択のプロセスに対する説明として非常に納得のいくものである。この説明は「返事」という語のみに限定された例外説明的ではあるが、これまで「語種」一辺倒で説明されてきた接頭辞「オ-/ゴ-(御)」に対してこれを用いた点は、共時的な使用原理に迫る意味で妥当性が高いように思う。他の語に付く場合のオ-/ゴについても同様の説明が可能ではないだろうか。

それを試みるにあたって、この考え方と親和性が高いと予想されるポライトネス理論の観点を導入したい。以下、その内容と有効性について確認する。

7 ポライトネス理論の導入

7.1 オ-/ゴ選択を考えるにあたってのポライトネス理論の有効性

ポライトネス理論提唱者であるブラウン&レヴィンソン（以下、B&L）は、人類学・社会学・語用論の融和から、人間の言語相互行為に「対人配慮に関する普遍性」があることを見出した。ごく簡単にいえば、これがポライトネス理論の軸を成す考え方だが、この対人配慮による言語選択という考え方は、先ほどまで見てきた「お返事/ご返事」の使い分けの事例で検討した解釈に通ずる。先に「お返事/ご返事」を選択する際に対人関係が考慮されることを確認したが、目上の人や遠い関係の人にフォーマリティーの高い「ご返事」を使用するのは相手の立場に配慮した結果とも言える。ポライトネス理論では、相手への配慮をもとに言語表現を選択する原理について詳細に考察しており、これを導入することで「お返事」と「ご返事」が相手によって使い分けられるプロセスに対してより理解を深めることができ

るだろう。「お返事」と「ご返事」の使い分けと同じようにその他の場合の「オ／ゴ(御)」についても説明できないか、と考えるにあたって、ポライトネス理論を用いることは非常に効果的だと考えられる。

7.2 ポライトネス理論の内容

ポライトネス理論では、対人配慮を基に言語行為が選択されることが主張されているが、このような言語選択が行われる背景として主に以下の2つのことが挙げられている。

1. 人間は、ネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスという二方向の基本的欲求を持つ。
2. 人間は、コミュニケーションにおいて相手の欲求（フェイス）に配慮した言語表現を選択する。

ネガティブ・フェイスとは「“他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない”欲求」（滝浦（2008：17））であり、ポジティブ・フェイスとは「“他者に受け入れられたい・よく思われたい”欲求」（同）である。人間はこの二つの相反する欲求を同時に持っているが、一方が満たされれば一方は犠牲になってしまう。他者に踏み込まれぬよう距離をとれば他者に理解されることはありえず、他者に受け入れられようと距離を縮めれば他者から踏み込まれることは避けられないからである。そこで、コミュニケーションをとる際、私たちは相手がそれぞれの欲求をどの程度持っているのか（どの程度近付き、どの程度遠ざかりたいと思っているのか）を推し測った上で、それが満たされるちょうどよい距離を保った言語表現を選択する（＝2.）。この配慮の仕方にも二つの方向性があり、自己を守りたいという相手の欲求（ネガティブ・フェイス）に配慮して距離を置こうとするものを「ネガティブ・ポライトネス」、他者に開かれたいという相手の欲求（ポジティブ・フェイス）に配慮して近付こうとするものを「ポジティブ・ポライトネス」という。先ほど、ポライトネス理論では相手への配慮を基に言語表現を選択すると考える、と説明したが、より詳細に言うのならば、相手が持つ欲求への配慮を基に適切な「距離」をとれる言語表現を選択する、とするのが適切だろう。

このように言語表現に対して「距離」の理論を生んだところもまたポライトネス理論の画期的な点だとされる。なぜならば、これによって対人間で行われるあらゆる言語表現、言語行為を「距離」という一つのスケールで捉えることが可能となるからだ。なお、この言語表現の中にはもちろん「敬語」も含まれる。滝浦（2008：50）は、敬語とポライトネスの関係について「敬語のように相手を立て自分を下げる手段は、相手の領域に踏み込まない間接性において遠隔化的表現の典型であり、ポライトネスの表現手段としてもネガティブな方向性において機能する。」と述べている。また、B&L自身が、具体的にどのような言語表現がポライトネスを表す手段（ストラテジー）になるのかについて整理した中でも、「敬意を示す（Give difference）」こと、すなわち「敬語を使用すること」はネガティブ・ポライトネスのストラテジーの一つに数えられている。敬語の向かう対象は大抵話し手から見て目上の人やそれほど親しくない人、つまり、あまり近付くことが許されない（ネガティブ・フェイスを

より強く持っていると思われる)相手である。こうした相手に使われることから敬語が距離を遠くに置く働きを持つ、ネガティブ・ポライトネスの一つの手段であることがよく分かる。このように、敬語にポライトネス理論の距離の概念を用いることで、適切な説明を与えることができる。本稿の主題であるオ-/ゴ-は敬語接頭辞であるが、敬語とポライトネスの深い関係からも、やはりオ-/ゴ-にポライトネスの視点をを用いることの有効性が期待される。

8 ポライトネス理論から捉えた「お返事」と「ご返事」それぞれの距離

ポライトネス理論の距離の視点からオ-/ゴ-について考えるにあたって、まずは「お返事/ご返事」について見ていきたい。「返事」に敬語接頭辞オ-/ゴ-を付けた「お返事、ご返事」が元の形である「返事」より遠い距離の人に対して使われる、すなわちネガティブ・ポライトネスの手段として使われることについては問題ないだろう。

では、「お返事」と「ご返事」の間の距離はどうだろうか。西隈(2004)の例では、「お返事」は母親からこどもに対して用いられ、「ご返事」は部下から上司に対して、または、ビジネス相手同士で用いられていた。彼らの関係性を距離の概念で捉えると次のようになるだろう。母親とこどもは家族という、心理的にも社会的にも非常に距離に近い関係であり、むしろ距離をとるとよそよそしい感じを与えてしまう相手である。一方、部下と上司では上司の方が社会的に上の立場となるため、部下から見ると相手の領域に踏み込まないよう一定の距離を置かなければならない相手である。また、ビジネス相手とは基本的にビジネスの場でしか付き合うことはなく、プライベートな付き合いで行われるような踏み込み合いは互いに求めない関係だと考えられる。つまり、「お返事」は(「ご返事」に比して)距離の近い相手に対して使われ、「ご返事」は(「お返事」に比して)距離の遠い相手に使用されていると言えるだろう。また、アンケート調査では、「お返事」を親しい人に「ご返事」を目上の人や硬い関係の人に用いるとされており、このことからやはり「お返事」を距離の近い人、「ご返事」を距離の遠い人に使用すると言える。

さらに、調査では、より丁寧な場面や正式な場で「ご返事」を用いるという回答もあった。丁寧な場面や正式な場が具体的にどういう場なのか、どのようなものがあてはまるのかといったことについての具体的な言及はなかったものの、丁寧な場面というのは「丁寧な態度・表現を求められる場面」、また正式な場とは、おそらく、公的な場、または社会的な表立った場を意味すると考えられる。例えば、会社のようなビジネスの場であったり結婚式や葬式などの式典であったりがあてはまる。このような場では、相手との関係性とそれに伴う距離が再構成・再構築されるため、形式的な表現を用いなければならなくなると考えられる。例えば、同じ相手に対して休日に個人的に会うのと職場で会うのでは言葉づかいが変わるが、休日は友人同士、職場では一社員同士といったように、場によって異なる関係になるからではないだろうか。また、普段は仲の良い恋人同士でも、プロポーズ時には敬語を使うなど、改まった言語表現を選択するのは求婚者とそれを受ける者という関係になるためだと考えられる。今挙げた例は、私たちが生活する中で遭遇するであろう様々な場面、場のほんの一部でしかないが、おそらく正式な場において人間関係が再構成される場合、相手との距離は遠くなることが多いのではないかと。つまり、正式な場、すなわち相手との距離が相対的に遠く

なる場において「ご返事」が使われるということは、「ご返事」がやはり距離の遠い人に対して使われる表現だということを表しているのではないだろうか。

以上見てきたように、ポライトネスの観点から捉えると「ご返事」は距離の遠い人に対して、「お返事」は近い人に対して使う表現だと言うことができる。なお、ここまでポライトネス理論の、相手との距離に応じて言語表現を選択するという考え方に従ってきたが、これは裏を返せば、選択された言語表現を見れば、話者が相手に対して感じている距離を知ることができるということでもある。つまり、「ご返事」は遠い距離を「お返事」は（「ご返事」に比して）近い距離を表す表現だということでもある。

9 「お返事」と「ご返事」の距離はオ-とゴ-の働きによるものか

前節で、「お返事」と「ご返事」では、「ご返事」が遠い距離を「お返事」が（「ご返事」に比して）近い距離を表すことを示した。両者に共通する「返事」は、これらの語の語基であり、両者の違いは接頭辞ゴ-とオ-にしか見られない。このことから、「ご返事」と「お返事」に距離の差が見られるのは、ゴ-とオ-の働きによるものという仮説が立てられる。これはすなわち、ゴ-／オ-自体が距離の遠隔化／近接化の働きを持つために「ご返事」と「お返事」で表す距離の遠近が感じられているということである。

仮にオ-とゴ-自体が距離の遠近を表すとすれば、オ-／ゴ-選択で相手との距離調整が可能になり、多くの語に対してオ-／ゴ-選択で、相手との距離をはかることが原理的には可能になるはずである。例えば、旅行会社の人々が客に対しては「ご旅行楽しんできてくださいね」と言い、友人に対しては「お旅行楽しんできてね」と言うことが可能なはずであり、社長と同期社員2名がコーヒーを前にして「社長はご砂糖2つでしたよね。田中さんはお砂糖いらないんだっけ。」といった発話が行われていてもよいことになる。しかし、現実には「旅行」にはゴ-しか、「砂糖」にはオ-しか用いられない。「返事」のようにオ-もゴ-も付く語というのは、頑張ればいくつか例は探し出せそうなものの（「気分」など）、大多数の語はオ-かゴ-どちらか一方しか接続できない。「返事」のような語がオ-とゴ-どちらも付く語としてよく話題にされるのも、これが希少例であるからなのだろう。このように、オ-とゴ-自体に距離の差を認識し、相手との距離に合わせて使い分けるという実態はない、と言わざるを得ない。「お返事／ご返事」の個別論を超えて、オ-／ゴ-それ自体についての論にまで展開できる可能性を探ったが、オ-とゴ-自体が距離を持つという仮説は棄却せざるを得ない。

10 語基自体が距離を持つ可能性

ここで、アンケート調査で「返事」にはオ-しか付かないという回答者から得た(6)のコメントに注目したい。

- (6) 「返事」を丁寧にするときにはオ-を付けるが、そもそも目上の人には「返事」という語を使わない。「返事」より硬い語である「返信」や「返答」にゴ-を付けたものを使う。

「返事」と「返信」「返答」は、全く同じ概念を表す語というわけではないが、文脈によっては同じ意味で使うことが可能である。この意見によると、「返事」と「返信」「返答」を同じような意味で使う場合、「返事」よりも「返信」「返答」の方がより硬い語であり（ここで言う「硬さ」はおそらくフォーマリティーと同等のものと考えてよいだろう）、相手が目上の人であればこれらの中から硬い語である「返信」や「返答」を選び、これにゴ-を付けた「ご返信」や「ご返答」のような表現を用いるというのだ。これはつまり、語基自体にフォーマリティーの違いのようなものを感じ、相手との距離に合わせて語基を選択しているということである。

本稿では先行研究を踏まえ、ポライトネス理論の距離の視点を用いてオ-／ゴ-を捉えようと試みてきた。対人関係を調節する専用の道具として定着してきた表現である「敬語」の一種として、敬語接頭辞オ-／ゴ-が対人間の距離調整の働きを持つことは当然だと思われ、また「お返事」「ご返事」が相手に応じて使い分けられている事実から、これをポライトネスの視点から捉える意味も十分に見込めたためである。一方で、語基については語の構成要素として中心を担うものと認識しながら、それ自体を距離の視点から捉えることはしてこなかった。なぜなら、語基の基幹性というのは、それが形成する語の表す意味という点においてであり、語基の選択において判断の基準となるのは、それが表す意味が話者の表出したい事柄とどの程度一致するかという点にあると考えたためである。

しかし、(6)の指摘から考えられるのは、この語基の部分に意味以外の違いがあり、語基の選択は意味以外のその観点からも判断されているということである。なおその違いとして「硬さ」が、判断の要因として相手との関係性が挙げられていることから、語基についても距離の視点で見ることの必要性が十分にあると思われる。そこで、以下、語基を距離という観点から捉えることを試みたい。

10.1 ポライトネス理論から語基を捉える

語基をポライトネス理論、距離の視点から捉えるにあたって、同じような意味を表す二つの語をどのような場面で用いるか比較してみる。なお、同一言語内で、文脈を離れても表す概念が全く同一の語というのは、言語システムを効率的なシステムと考える限り、当然のごとく考えにくい。ここで「同じような意味」というのは「ある文脈内で」と解釈されたい。

まずは、“友”という意味を表す「友人」と「友達」について考える。（なお、以下の文の話し手はいずれも二十歳前後の学生身分を想定している。）

(7) (先生に向かって)

「友人が事故に遭って入院してしまったので、明日お見舞いに行つて来ます。」

(家族に向かって)

「友達が事故って入院しちゃったから、明日お見舞い行つてくるわ。」

(7)の例は、同じ内容を伝える文において「友人」「友達」を使用する場合、どのような場面で使うことが想定されるかという点から考えた作例である。それぞれの文意に差異はなく、ここでは「友人」と「友達」を同義語と扱ってかまわないだろう。なお、前者では、先生と

いう社会的距離が遠く、言語表現も距離を遠くに置くものを使うべき相手に対して『友人』を用い、後者では社会的にも心理的にも距離が非常に近い関係である家族に対して「友達」を用いている。「友人」と「友達」をそれぞれ先生と家族に対して使用することについて、距離に関する問題はないだろう。では、(8)のように、それぞれの相手に対して、「友人」と「友達」を入れ替えた表現にするとどうなるだろうか。

(8) (先生に向かって)

「友達が事故に遭って入院してしまったので、明日お見舞いに行つて来ます。」

(家族に向かって)

「友人が事故って入院しちゃったから、明日お見舞い行つてくるわ。」

「友人」と「友達」を入れ替えても文意は通り、両者に差異はない。しかし、前者については先ほどの「友人」を用いた文とこの発話を比べると、話者と聞き手である先生との関係性への印象はやや異なるものとなるだろう。多くの場合、先ほどよりラフな印象、すなわち先生と話者の関係が親しくなったような印象を受けるのではないだろうか。また、後者については、「事故って」「入院しちゃった」「行つてくるわ」などといった語の中で「友人」だけがやけに堅苦しく、浮いたような感がある。しかし、だからと言って「友人」に合わせて文全体を入れ替えてしまえばよいかと言えばそうでもない。家族に対して「友人が事故に遭って入院してしまったので、明日お見舞いに行つて来ます。」という表現は口頭ではあまり使われないだろう。もとより個人差・社会環境差はあるが、この表現が成立する家庭は、家柄の非常によい立派な家庭か、さもなければ冷え切った関係の家族のように思われる。これは、そもそも家族間で「友人」という語を使うこと自体への違和感（つまり、不適切なポライトネス・ストラテジー）から来るものではないだろうか。「友人」を先生に対しては違和感なく使用でき、家族には使用できない一方で、「友達」は家族に使用でき、先生に対しては使用すると親しさが増すような印象を与える。このことを、距離の視点から考えるならば、「友達」は距離の近い相手に「友人」は距離の遠い相手に使われるということになるだろう。家族に対して「友人」を使うことができないのは、「友人」の表す距離が家族間のそれと違いすぎるためだと考えられる。なお、「友人が事故って入院しちゃったから、明日お見舞い行つてくるわ。」という文で「友人」だけが浮いてしまうのは、文中の他の語の持つ距離がやはり「友人」のそれと異なるために起こるのだろう。「事故って」も「入院しちゃった」も「行つてくるわ」も、先生に対しては使えないか、使うことがあっても非常に親しい間柄でしか使われないだろう。つまり、これらの表現にも使用できる距離というものがあり、相手との距離に応じた使い分けを私たちは行っているということである。以上のように、「友人」と「友達」については相手との距離に応じた使い分けが行われていそうである。

では次に、「職業」と「仕事」についても見てみよう。

(9) (知り合い程度の人に対して)

「そういえば、職業は何をされてるんでしたっけ？」

(親しい友人に対して)

「そういえば、仕事は何をしてるんだっけ？」

文を見ただけではやや判断しづらいかもしれないが、聞き手の職業は何かと尋ねている場面である。「職業」は知り合い程度というやや遠い関係の人、「仕事」は友人という近い間柄の人に用いているが、距離感については問題ないだろう。では、これを先ほどと同じように「職業」と「仕事」を入れ替えてみるとどうだろうか。

(10) (初対面の人に対して)

「そういえば、仕事は何をされてるんでしたっけ？」

(親しい友人に対して)

「そういえば、職業は何をしてるんだっけ？」

ここでもまた、知り合い程度の人に「仕事」を用いると少しぞんざいな感じが生まれたり、友人に対しては「職業」はあまり使わない、といったことが起こってくるだろう。これは「職業」と「仕事」とでは「職業」の方が遠い距離を表し、「仕事」は初対面の人に対して使うには距離が近すぎ、「職業」は親しい友人に対して使うには距離が遠すぎるといったことから起こるのだと考えられる。

本節では、「友人/友達」「職業/仕事」の例をもとに語基自体を距離の視点から捉えることを試みた。その結果、「友人」「職業」は「友達」「仕事」より遠い距離の相手に使われることが考えられ、語基自体を相手との距離によって使い分けることは確かにありそうだ。対人配慮をネガティブ/ポジティブ間の距離として捉えるスケールを、ポライトネス・スケール(以下、単にスケールとも)と呼ぶとすると、その距離によって言語選択がなされる、ということは、ここで問題にしている語基自体が、そのスケール上に分布していると見ることができる、ということでもある。よって、「友人」「職業」の方が、(個人差・程度差はあるだろうが)ポライトネス・スケール上、それぞれ「友達」「仕事」よりも遠隔に分布している言語表現である、と捉えることができる。ここでは、二組四語について検討しただけだが、他の多くの語についても同じことが言えそうである。例えば、「理由/わけ」「配慮/気遣い」「自宅/住まい」などを詳しく観察しても同じような結果が見られるだろう。

10.2 複合語の形成と距離の関連

語基となる語自体が、ポライトネス・スケール上に分布するものとして捉えられそうであることを仮説として提示した。この仮説の有効性を検証するために、今度はやや視点を変えて、先ほど例に挙げた語基がどのような複合語を形成するかに着目してみたい。つまり、ポライトネス・スケール上で離れた位置にある語同士は複合形成しにくい可能性が考えられるからだ。

例えば「友人」という語は「友人関係、友人代表」といった語を、「友達」は「遊び友達、飲み友達、^{おきな}幼友達」といった複合語を作る。「友達関係・友達代表」と表現できなくはない

が、いささか落ち着きの悪さを感じるし、「遊び友人・飲み友人、^{おきな}幼友人」などは、まず聞かない。辞書などを用いてこれらの語基を含む複合語を探してみると、(11)のような複合語が見つかる。(／の左にあるものは前接語、右にあるものは後接語を示す)

(11) a. 「友人」と複合語を作る語：

／関係、代表

b. 「友達」と複合語を作る語：

遊び、幼、削り、子供、酒、茶飲み、寺、飲み、のら、わらわ／甲斐、付き合い

ここで、語基「友人、友達」に接続する語の、ポライトネス・スケール上の位置・距離感を内省によって検討したい。それぞれの語について同義語または類義語を1つ挙げそれぞれの距離を比べることを試みたい。例えば「遊び」の類義語は「遊戯」といったところであるが、この二つを比べると「遊戯」の方が断然文体的に硬い印象がある。この文体的「硬さ」は、フォーマリティの「高さ」に変換可能である。例えば研究論文や研究書のタイトルを考えてみた場合、「古代日本の遊戯に関する研究」と「古代日本の遊びに関する研究」とでは、前者の方がよりフォーマリティが高く感じられよう。他の語についても同様に見ていくと「間柄<関係」「飲み<飲酒」「のら<不良」「こども<小児」「寺<寺院」「わらわ≡こども<小児」「幼<幼少」「付き合い<交際」といった距離感の差(小<大)があることは容易に指摘できよう。

さて、「友達」「友人」それぞれと複合語を作る語を距離の視点で捉えると、ある特徴が見えてくる。それは、距離が遠い相手に使われる「友人」には、同じく類義語と比べて距離の遠い「関係」のような語が、距離の近い相手に使われる「友達」には距離の近い「遊び」「飲み」「のら」「こども」「寺」「わらわ」「幼」「付き合い」などが付くということである。つまり、距離の遠いもの同士、近いもの同士で複合語を形成する傾向が見られるのだ。先に述べた「ポライトネス・スケール上で離れた位置にある語同士は複合形成しにくい」ことが指摘できる。それに準じて考えると「代表」「茶飲み」など比較すべき類義語が見当たらないものも、複合する要素からその距離も推測できることになる。

次に「職業／仕事」について見てみる。同様に複合語となる要素を収集してみると、(12)のようになる。

(12) a. 「職業」と複合語を作る語：

／安定所、安定法、案内、意識、柄、教育、軍人、訓練、指導、紹介所、選択、団体、適正検査、病、婦人、野球

b. 「仕事」と複合語を作る語：

唄、納め、柄、着、給、算、師、場、箱、選び、始め／やっつけ、手間、骨、手、針、水、庭、力、儲け、ひと、お役所、^{たな}店

一語ずつ同義語を挙げて距離を確認することはしないが、「職業」に付く語は全体的に硬い語が多く、「職業安定所」や「職業別組合」のように公的な場所や組織を表す複合語も見

られる一方、「仕事」を含む複合語には「針仕事」や「仕事着」など生活に密着したものを表す語が多く見られる。なお、注目すべきは「職業選択」と「仕事選び」という語だ。両者の表すものは同じであるが、「職業」には「選択」、「仕事」には「選び」という語が付いている。「選択」と「選び」を比べると、やはり「選択」の方が距離の遠い相手に使われるだろう。なお、「職業選び」「仕事選択」のように「遠+近」「近+遠」という距離の組み合わせの複合語はあまり見られないようだ。このことから、やはり複合語を作る際には、遠い距離のもの同士、近い距離のもの同士が結びついて形成される傾向が見て取れる。これは裏を返せば、どのような語と複合語を作るかを見ればその語の距離を知ることができるということにもなるだろう。

さて、本節で述べてきたことは、従来「音ヨミ+音ヨミ」「訓ヨミ+訓ヨミ」という「読みの原則」といった、漢字表記の読み方の側から説明されてきたことと表面的には重なることである。しかし、この「音ヨミ」「訓ヨミ」といった説明は、結局のところ語種説明と同断であり、共時的説明原理として記述するには不十分であることは、もはや言うまでもないであろう。

11 語基の距離とオ-/ゴの関係

前節では、「友人/友達」「職業/仕事」を例に語基自体を距離により使い分けること、語基自体に距離の違いがあることを示し、複合語の形成とそれを構成する語の距離の間にどのような関わりがあるかを考えた。ではここで、「友人/友達」「職業/仕事」それぞれを敬語表現にするときオ-とゴ-どちらが付けられるのかを考えたい。「友人」はゴ-を付けて「ご友人」に「友達」はオ-を付けて「お友達」となるだろう。また、「職業」はゴ-を付けて「ご職業」に「仕事」はオ-を付けて「お仕事」となる。ゴ-の付く「友人」と「職業」の距離は、先ほど確かめたところ遠いものであったし、オ-の付く「友達」と「仕事」は近い距離の語であった。このことから、距離の遠い語にはゴ-が距離の近い語にはオ-が付けられる傾向があると考えられる。

なお、このように考えるならば、これまでの「語種」の捉え方では説明しきれなかった「お+漢語」「ご+和語」のような例についても説明することができる。例えば「掃除」は漢語でありながら、オ-が付く語であるが、これは私たちの生活に密着した語であるためか、あまり硬い印象は感じられない。複合語を見ても「掃き掃除」「大掃除」のように、近い距離の語と付く場合が多く見られることから「掃除」は近い距離で使われる語であると言える。そのため、もし「掃除」を敬語表現にしようとした場合、その距離の近さからオ-が付くと判断されるのだと説明できる。また、「ごもっとも」「ごゆるりと」などの例はこの反対で、和語でありながら距離を遠くに置く（相手への配慮の程度が大きい）使用方法が多いためにゴ-が付くのだと考えられる。

さらに、「返事」のようにオ-とゴ-どちらも付く語については、その距離がオ-が付けられる距離とゴ-が付けられる距離のちょうど中間のようなどころにあり、個人によって、また場合によってその距離にゆれが生じているのではないだろうか。そのようであるために、ある人は「返事」を近い距離のものと認識して「お返事」とし、またある人は「返事」を遠い

距離のものとして「ご返事」とするということが起こったり、ある場面では「返事」に近い距離のものと認識して「お返事」とし、またある場面では「返事」を遠い距離のものとして「ご返事」とするといったことが起こったりすると考えられる。

このように、語基の距離によって「オ-／ゴ-(御)」どちらが付くか判断されると考えることで、「語種」で捉える場合には例外とされてきたものまで含めて、接頭辞「オ-／ゴ-(御)」について説明することができる。

12 まとめ

本稿では、敬語接頭辞「オ-／ゴ-(御)」の使い分けについて、それが付く語基も含めてポライトネス理論の距離の視点から捉えることで、その選択がどのようになされているのか考察した。その結果として、以下のことを指摘した。

1. 語基自体を相手との距離によって使い分けしている
2. (1. から) 語基自体がそもそもポライトネス・スケール上に分布していると思われる
3. 選んだ語基の距離によってオ-が付くかゴ-が付くかが判断される
4. 語基の距離が遠い場合はゴ-が、近い場合はオ-が付く

なお、語基の距離によって「オ-／ゴ-(御)」のどちらが付くか判断されると考えることで、これまでの「語種」での捉え方では例外とされてきた「お+漢語」「ご+和語」「おとご両方付くもの」などについても説明することが可能な視点を提示できたと考える。「返事」のように、オ-／ゴ-どちらも付くものは、語基のスケール上での分布域がかなり広いものとみなされよう。

参考・引用文献

1. 浅田秀子 (1996) 『敬語マニュアル』南雲堂
2. 池上秋彦 (1984) 「体言の敬語法」 鈴木一彦・林巨樹編 (1984) 『研究資料日本文法第9巻 敬語法編』明治書院
3. 菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店 (菊地康人 (1997) 『敬語』講談社学術文庫、による)
4. 国立国語研究所編 (1992) 『国立国語研究所調査報告42 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)』秀英社
5. 柴田 武 (1957) 「「お」の付く語・付かない語」 『言語生活』70号
6. 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
7. 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
8. 滝浦真人 (2011) 「ポライトネス」 『日本語学』30-14 (明治書院)
9. 田中章夫 (1972) 「「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば」 『国文学解釈と鑑賞』465号、至文堂
10. 辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』明治書院

11. 西隈俊哉 (2004) 「『お』と『ご』の使い分け」『月刊日本語』2004年11月号、アルク
12. 宮田剛章 (2005) 「お」か「ご」か? 日本語母語話者による名詞の敬語化 日本語能力試験の語彙から」『計量国語学』25巻3号
13. Penelope Brown and Stephen C. Levinson (1987) "Politeness: Some Universals in Language Usage" Cambridge University Press (田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社、による)

付記

本稿は、奥瀬真紀が2013年1月に信州大学人文学部に提出した卒業論文「接頭辞「御」について—ポライトネス理論をもとに—」に基づく。本研究は、奥瀬の発案により始められ、山田がその指導に当たった。授業外での個別指導や大学院授業への特別参加などを通じて、両人で議論を重ねたものである。当該の事象説明にポライトネスの観点を導入することを提案したのは山田であるが、それを「卒業論文として埋もれさせるには惜しい」と、論文審査に当たった他の教員にまでも言わしめるレベルにまで押し上げたのは奥瀬の力である。

奥瀬本人は、現在研究環境にいないため論文発表の場がない。そこで、指導教員であった山田との共著として公表することとした。投稿規程により山田が第一執筆者になってはいるが、本論文において評価されるべき点があるとすれば、それは奥瀬の功績であり、山田は指導教員としての義務を果たしたに過ぎなく本来出る幕はない。しかし、本研究に批難されるべき点があるならば、その責は全て山田が負うべきものである。(山田記)

(2013年10月31日受理 12月6日掲載)

